

原発警戒地域における高校生の将来展望 ——福島県楡葉町の意識調査から——

大 橋 保 明

1. 問題の所在

2011年3月11日(金)午後2時46分、当時いわき明星大学に勤務していた筆者は人文系館5階の研究室内にいた。震度6の烈震が3分ほど続き、揺れにより舞い上がった大量のスギ花粉と土埃で研究室からの見慣れた街並みが一瞬にして見えなくなってしまったことを今でも覚えている。幸い、大学に関わるすべての学生および教職員に人的被害はなく、震災後の施設復旧や教育研究活動の正常化に向けて一丸となって前進することができた。また、大学内部の復旧・復興とともに、地域の教育施設としての大学の使命を果たすべく、いわき市内はもちろん近隣の自治体や学校等への支援にも尽力してきた。参考までに大学内への主だった受け入れ状況のみ列挙すれば、大学再開以前の2011年4月25日に原発警戒区域の双葉郡楡葉町役場の出張所(継続中、図1)を大学会館に受け入れ、大学の入学式が挙行された5月14日以降は、校舎が使えなくなった福島県立湯本高校の生徒および教職員約950名(同年8月まで)や津波および原発被害を受けたいわき市立久之浜第一小学校の学童クラブ(同年10月まで)を受け入れてきた。さらに、2012年4月からは原発警戒区域指定により学校再開の見通しが立たない福島県立双葉高校、福島県立双葉翔陽高校、福島県立富岡高校の三校の生徒および教職員約600名を当面3年間の予定で学内に受け入れるとともに(継続中、図2)、同年三学期からは大学敷地内に建設中の仮設校舎で楡葉町立楡葉中学校、楡葉北小学校、楡葉南小学校の三校が新たに教育活動

を再開する予定である¹⁾ (檜葉町2012b)。



<図1> 大学会館内の檜葉町役場いわき出張所



<図2> 大学に通学する高校生たち写真

このような経過から、原発避難が続く檜葉町と大学との連携協力体制が早い時期に構築され、2011年8月に実施された「檜葉町町民アンケート」(有効回収数1,995名、回収率68.8%)の調査結果について共同で分析にあた

るとともに、学術的な発信にも努めてきた（菅野・高木2012、柳澤・菊池2012、大橋・高木2012）。紙幅の関係で詳細は割愛せざるを得ないが、これらの発信において、時間の経過とともに複雑化・多様化する原発避難者の状況を丁寧に把握し（菅野・高木2012）、大人だけではなく若者や子どもたちへの多面的な意向調査が必要であることが指摘された（大橋・高木2012）。これらの指摘を踏まえつつ、楡葉町の全面的な協力の下、2012年1月に「震災後における楡葉町高校生世代の現在の生活と将来に関する意識調査（以下、高校生意識調査）」（有効回収数170名、回収率61.6%）の実施・分析、2012年2月には「震災後における楡葉町町民の現在の生活と将来に関する意識調査」（有効回収数767名、回収率51.7%）の実施・分析を行い、調査結果や分析結果等を行政および町民に公表してきた。

そこで本稿では、原発事故で故郷を追われ、今もなお不安定な避難生活が続く楡葉町の若者、特に高校生たちが「現在」の避難状況をどのように捉え、帰町を含めた「将来」の展望をどのように描いているのかについて、高校生意識調査の結果からその一端を明らかにしたい。

2. 調査の概要

（1）調査対象地の概要

楡葉町は、福島第一原子力発電所から20km圏内に位置する人口約7,700人の小さな町である。楡葉町に関わって震災翌日3月12日（土）の経過を整理するだけでも、静かな町の大きな混乱ぶりが伝わってくる。午前7時45分福島第二原発に関わる国からの避難指示および屋内退避指示、午前8時楡葉町独自の判断による全町民避難指示、午後6時25分国による避難指示区域の指定となり、多くの町民は南部のいわき市に一時避難し、四日後の3月16日には災害相互応援協定を締結していた県内陸部の会津美里町へ全町避難を開始した。その後も状況は刻々と変化し、2011年4月22日に町内全域が警戒区域に指定されたことにより、町への一切の立ち入りが禁

止された。震災から一年半を目前にした2012年8月10日に警戒区域が突然解除され、同時に避難指示解除準備区域に指定されたが、現時点では町への立ち入りに制限はない。2012年4月25日現在の避難者数は、県内6,336名(82.5%)、県外1,348名(17.5%)となっているが(檜葉町2012b)、警戒区域が解除されても除染活動やライフラインの整備が十分ではなく、町民の心理的な不安も払拭されていないため、町の復旧・復興にはなお相当な時間を要すると思われる。

(2) 調査の対象と方法

この高校生意識調査は、調査時点で檜葉町に住民登録されている16～18歳の全町民276名(悉皆)を対象として、町が把握している避難先への郵送法で実施した。実施時期は2012年1～2月、回収数170名(男性88名、女性82名)、回収率は61.6%であった。

調査内容は、属性、家族に関すること、高校生活に関すること、避難生活に関すること、友人関係に関すること、卒業後の進路について(高校3年生のみ)を大項目として全29問で構成されるが、特に避難生活に関することの中で「帰町意識」(問14-16)や「町の重点施策」(問17)について質問した(全質問項目については巻末資料参照)。

(3) 調査対象の属性

ここでは、属性についてのみ結果の概要を示しておきたい。

「問20 高校生の学年の内訳」は、高校1年生55名(32.3%)、高校2年生62名(36.5%)、高校3年生49名(28.8%)、その他4名(2.4%)となっており、各学年3割前後で均等に分布していた。

「問2 現在の居住形態」については、借上げ住宅・雇用促進住宅102名(60.0%)、借家(自己負担)28名(16.5%)、仮設住宅27名(15.9%)、親戚・知人宅6名(3.5%)、その他7名(4.1%)となっており、経済的な負担が少なく私的空間を確保できる借上げ住宅・雇用促進住宅が6割を占めた。

「問3避難地域」については、いわき市131名（77.0%）、福島県外20名（11.8%）、福島県内19名（11.2%）となっており、約8割の高校生が住み慣れた浜通り南部のいわき市で避難生活を送っていることがわかった。この点については、「問9震災前の高校の通学地域」において、震災前からいわき市内89名（52.4%）に通学していた高校生が多かったことや双葉郡内²⁾の高校が震災後にいわき市内にサテライト校³⁾を開設してきたこととも関わり、保護者が子どもたちの学業を最優先に避難生活地域を選択していることが考えられる。

3. 調査の結果および分析

前節および巻末資料のとおり、本調査の質問項目は多岐に及ぶため、本節では避難生活の「今（現在）」に関わる「問10震災後に通学している学校」と「問13避難生活での困りごと」について、また「将来（未来）」に関わる「問14帰町意識」と「問17復旧・復旧に向けた町への要望」について、調査結果の整理と分析を試みたい。

（1）「問10震災後に通学している学校」について

〈表1〉は、問10「震災後、あなたは同じ学校に（予定通りの学校に）通っていますか（○は1つ）」の単純集計結果である。同じ高校に通学45.3%、他の高校に転校30.6%、同校サテライト22.9%の順で高い割合を示しているが、通学場所の変更があってもサテライト校を同じ高校として考えると、震災後も同じ高校に通っている人が約7割を占めていることになる。一方で、転校した人が約3割確認でき、〈表2〉の学年と震災後の学校のクロス集計結果が示すように、転校した高校3年生が8.2%であるのに対して、高校2年生35.5%、1年生44.4%と学年が下がるほどその割合が高くなっていることから、学年の低い生徒たちの他地域への転出等が今後も懸念されるところである。

＜表1＞ 震災後の学校

		度数	パーセント
災害後の学校	同じ学校に通学	77	45.3
	サテライトで同じ学校	39	22.9
	他の高校に転校	52	30.6
	その他	2	1.2
	合計	170	100.0

＜表2＞ 学年×震災後の学校

		震災後の学校				合計	
		同じ学校に通学	サテライトで同じ学校	他の高校に転校	その他		
高校の学年	高校3年生	度数	25	20	4	0	49
		総和の%	15.0%	12.0%	2.4%	.0%	29.3%
	高校2年生	度数	29	11	22	0	62
		総和の%	17.4%	6.6%	13.2%	.0%	37.1%
	高校1年生	度数	22	7	25	1	55
		総和の%	13.2%	4.2%	15.0%	.6%	32.9%
高校に通っていない		度数	0	0	0	1	1
		総和の%	.0%	.0%	.0%	.6%	.6%
合計		度数	76	38	51	2	167
		総和の%	45.5%	22.8%	30.5%	1.2%	100.0%

(2) 「問13避難生活での困りごと」について

＜表3＞は、問13「避難生活のなかで困っていることはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください（○はいくつでも）」の単純集計結果である。避難生活でのストレス52.4%、学習環境が不十分24.1%、夜なかなか眠れない18.8%、生活環境が不便18.2%の順で高い割合を示している。実に半数以上の人は何らかのストレスを感じていることになるが、その内実については本調査から断定することはできない。しかし、授業内容等への戸惑い13.5%や話し相手がない11.8%の結果からは、サテライト校での学校環境（学習、通学など）の厳しさや友人関係の変化などが多分に影響を与えていると考えられる。

＜表3＞ 避難生活での困りごと

困りごと	応答数		ケースのパーセント(N=135)
	N	パーセント	
話し相手がいない	20	7.2%	14.8%
新しい学校になじめない	10	3.6%	7.4%
避難生活でストレス	89	32.0%	65.9%
カリキュラムや授業内容が違う	23	8.3%	17.0%
学習環境が不十分	41	14.7%	30.4%
家族との関係がうまくいかない	12	4.3%	8.9%
夜なかなか眠れない	32	11.5%	23.7%
やってた部活が避難先の学校に	12	4.3%	8.9%
地域の生活環境が不便	31	11.2%	23.0%
その他	8	2.9%	5.9%
合計	278	100.0%	205.9%

＜表4＞ 学年×避難生活での困りごと

		避難生活での困りごと										合計	
		話し相手がいない	新しい学校になじめない	避難生活でストレス	カリキュラムや授業内容が違う	学習環境が不十分	家族との関係がうまくいかない	夜なかなか眠れない	やってた部活が避難先の学校にない	地域の生活環境が不便	その他		
高校の学年	高校3年生	度数	7	2	26	8	15	3	9	6	10	3	38
		学年内での割合 (%)	18.4%	5.3%	68.4%	21.1%	39.3%	7.9%	23.7%	15.8%	26.3%	7.9%	
高校2年生	度数	6	4	34	10	16	3	12	5	10	3	50	
		学年内での割合 (%)	12.0%	8.0%	68.0%	20.0%	32.0%	6.0%	24.0%	10.0%	20.0%	6.0%	
高校1年生	度数	6	4	25	4	9	6	10	1	10	2	43	
		学年内での割合 (%)	14.0%	9.3%	58.1%	9.3%	20.9%	14.0%	23.3%	2.3%	23.3%	4.7%	
高校に通っていない	度数	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	
		学年内での割合 (%)	100.0%	.0%	100.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	
合計	度数	20	10	86	22	40	12	31	12	30	8	132	
		学年内での割合 (%)											

＜表4＞は、学年と避難生活での困りごとのクロス集計結果である。回答の割合の上位は単純集計結果の傾向と違いはみられないが、高校3年生と2年生の約7割もの方が避難生活で何らかのストレスを感じていることがわかった。また、学年が上がるほど学習環境が不十分であると感じ（高校3年生39.5%、高校1年生20.9%）、カリキュラムや授業内容への戸惑いも見取れ（高校3年生21.1%、高校1年生9.3%）、転校を伴わないまでも原発避難に伴う学習環境の変化が生徒たちに大きな影響を及ぼしていると推

察される。この点については、今後、可能な範囲で質的な調査が求められるところであり、高校生一人ひとりの声を丁寧に把握しながら（鎌田ほか2012）、効果的な対策を早急に打ち立てる必要がある。

（3）「問14帰町意識」について

〈表5〉は、問14「将来、あなたは檜葉町に戻りたいと思いますか（○は1つ）」の単純集計結果である。この質問はシンプルでありながら、今回の調査において最も慎重に扱われた質問である。わからない37.6%、戻りたい34.1%、戻るつもりはない28.2%とおおよそ3分の1ずつに回答の割合が分かれる結果となったが、特にわからない群の約4割もの人が帰町に関する意識や態度を決めかねている現状が明らかになった。

〈表6〉は、学年と帰町意識のクロス集計結果である。学年と帰町意識に有意な差は認められなかったものの、学年が下がるほど帰町意識が若干高くなる傾向が見られた。この傾向は、若い世代ほど帰町意識が低くなる傾向にあった「檜葉町町民アンケート」や福島大学災害復興研究所による実態調査（2012）の結果⁴⁾とは明らかに異なるものであった。問15では戻りたい群に戻るための条件を、また問16では戻らない群に戻らない理由をそれぞれ尋ねているが、戻るための条件として放射線量の低減と安全な暮らしの確保51.7%、戻らない理由として除染が困難59.6%の結果が示すとおり、どちらも半数以上が放射線への不安を回答している。自明ではあるが、放射線への実態のかつ心理的な不安が完全に解消されないかぎり、地域再生の主役となる若者が町に戻り、生活を再開することは困難であると言わざるを得ない。

（4）「問17復旧・復興に向けた町への要望」について

〈表7〉は、問17「檜葉町が災害から復旧・復興するために、町が最も重点的に取り組むべきことはなんでしょうか（○は1つ）」の単純集計結果である。本質問の5つの選択肢は、2012年1月30日に策定された「檜

＜表5＞ 帰町意識

		度数	パーセント
帰町意識	戻りたい	58	34.1
	戻らつもりはない	48	28.2
	わからない	64	37.6
	合計	170	100.0

＜表6＞ 学年×帰町意識

		帰町意識			合計	
		戻りたい	戻らつもりはない	わからない		
高校の学年	高校3年生	度数	13	16	20	49
		高校の学年の%	26.5%	32.7%	40.8%	100.0%
高校2年生	高校2年生	度数	24	19	19	62
		高校の学年の%	38.7%	30.6%	30.6%	100.0%
高校1年生	高校1年生	度数	20	11	24	55
		高校の学年の%	36.4%	20.0%	43.6%	100.0%
高校に通っていない	高校に通っていない	度数	1	0	0	1
		高校の学年の%	100.0%	.0%	.0%	100.0%
合計	合計	度数	58	46	63	167
		高校の学年の%	34.7%	27.5%	37.7%	100.0%

＜表7＞ 檜葉町の重点課題

		度数	パーセント
重点課題	長引く避難生活への対応	26	15.3
	原子力災害への対応	54	31.8
	帰町後の生活環境の整備	54	31.8
	新たなまちづくり	13	7.6
	災害に強いまちづくり	4	2.4
	その他	5	2.9
	N.A	14	8.2
合計	合計	170	100.0

葉町復興ビジョン」に示された5つの柱に対応しており、町政への反映も意識して設定されている。結果としては、原子力災害への対応31.8%、帰町後の生活環境の整備31.8%、避難生活への対応15.3%の順で高い割合を示していた。基本的には復旧・復興に向けた未来志向の回答の割合が約7割を占めていたが、現在の避難生活への対応を求める回答の割合が三番目に高かったことは看過できない事実である。

〈表8〉は、帰町意識と檜葉町の重点課題のクロス集計結果であるが、戻りたい群の帰町後の生活環境の整備を重視46.9%、わからない群の原子力災害への対応38.1%、戻らなかつた群の避難生活への対応を重視29.5%と原子力災害への対応29.5%の順で高い割合を示していた。一口に帰町後の生活環境の整備や原子力災害への対応といってもその中身は多岐にわたると考えられるが、調査時点において町に戻りたい人ほど未来への支援を求め、戻らなかつた人ほど現実への支援を求める傾向にあることがわかった。

〈表8〉 帰町意識×檜葉町の重点課題

		檜葉町の重点課題						合計	
		長引く避難生活への対応	原子力災害への対応	帰町後の生活環境の整備	新たなまちづくり	災害に強いまちづくり	その他		
帰町意識	戻りたい	度数	4	17	23	3	1	1	49
	帰町意識の%	8.2%	34.7%	46.9%	6.1%	2.0%	2.0%	100.0%	
	戻らなかつた	度数	13	13	9	7	0	2	44
	帰町意識の%	29.5%	29.5%	20.5%	15.9%	.0%	4.5%	100.0%	
わからない	度数	9	24	22	3	3	2	63	
	帰町意識の%	14.3%	38.1%	34.9%	4.8%	4.8%	3.2%	100.0%	
合計	度数	26	54	54	13	4	5	156	
	帰町意識の%	16.7%	34.6%	34.6%	8.3%	2.6%	3.2%	100.0%	

4. 小括

本稿では、檜葉町の高校生意識調査の結果から、高校生の現在の状況と未来への展望について考察してきた。ここでは、まとめに代えて次の二点を指摘しておきたい。

ひとつは、学年が下がるほど現実的な判断としての転校、すなわち遠方への進学・就学機会が高まるということである。若い世代ほど帰町意識が低く、遠方避難を志向することは他の自治体にもみられる一般的な傾向であるが、特に中学3年生（部活引退時や志望校選択時など）と高校3年生（進学先選択時や進学・就職の選択時など）が進路選択の岐路において難しい判断を迫られていることが推察される。また、緩やかではあるが学年が低いほど高い帰町意識を有する一方で低学年ほど震災後の転校が多いという事実は、原発事故後の高校生をめぐる学校環境や生活環境がいかに厳しいものであるかを示している。状況が刻々と変化中、その時点においてどのような視点からどのような助言・指導ができるのか、またすべきであるのかが、子どもたちに関わるすべての大人に突きつけられている。

もうひとつは、確かな知識や経験を培うためのゆたかな学びを社会全体で保障していくことである。帰町意識についてみても約4割の人が現時点での判断を保留していたが、どのような意見や判断に至るとしても判断の基盤となる確かな科学的知識や正確な情報の習得、ディスカッションや社会活動への参画の機会などは、学校カリキュラムにおいて確実に取り組まれるべきである。すでに防災・減災教育や安全教育、異文化理解教育や体験学習など様々に展開されているが、これら多様な教育活動を学校だけでは成し得ないものと捉え返し（決して学校を否定するものではない）、学校を中心として社会全体で災後社会におけるゆたかな学びを保障していくことが求められる。

補足的にもうひとつ加えれば、県外避難者と県内避難者（いわき市内避難者を含む）の間に、帰町や復旧・復興に向けた意識の乖離が見え始めている点である。この点については本稿で扱うことができなかったが、回答数は少ないものの、県外避難者の戻りたい群の割合は他群よりも高い傾向にあることが指摘されている（高木2012）。厳しい現実をどこで感じているかに関わらず、同じコミュニティの一員として、交流の機会や情報ツールの活用等を通して情報格差を解消し、町民同士のつながりを維持してい

く必要がある。

檜葉町は、2012年1月30日の「檜葉町復興ビジョン」をベースとして（檜葉町2012a）、同年4月26日に「檜葉町復興計画（第一次）」を策定した。教育に関する事項については必ずしも十分とは言い難いが、本格復興期（平成26年度）までに「魅力ある小中学校の再生」として「①小学校統合・小中一貫校化も視野に入れた教育環境整備、②より魅力ある学習環境の整備」が掲げられている（檜葉町2012b）。計画の途上において様々な困難や不測の事態も考えられるが、学校移転に関わる過去から現在までの教訓（小笠原2002、田中他編2009、竹内他編2012、福島2012a・2012bなど）に学びながら、チルドレン・ファーストの精神を大切に的中長期的な展望の中で復興への歩みを着実に進めていかなければならない。その際、主役になるのは高校生をはじめとした若い世代であり、子どもたちであることを決して忘れてはならない。

<付記>

本研究は、平成23年度いわき明星大学学長特別研究奨励金「原発被災地域における地域コミュニティ維持に関する社会学的研究—檜葉町を事例として」（研究代表：高木竜輔）および平成24年度科学研究費補助金基盤研究（C）「原発事故・避難に伴う地域社会の維持に関する社会学的研究—広野町と檜葉町を事例に」（課題番号：24530647、研究代表：石丸純一）による研究成果の一部として公表するものである。

<参考文献・資料>

福島大学災害復興研究所編（2012）「平成23年度双葉8か町村災害復興実態調査基礎集計報告書」（第2版）<http://fsl-fukushima-u.jimdo.com/> 双葉八町村住民災害復興実態調査／

福島正行（2012a）「東日本大震災に伴う「学校移転」における学校教育へのインパクト」『工学院大学研究論叢』（49-2）、pp.17-30

- (2012b)「東日本大震災における他自治体への「学校移転」に関する事例研究—被災自治体・大熊町教育委員会と受け入れ自治体・会津若松市教育委員会へのインタビュー調査を通じて—」『東京学芸大学紀要』（総合教育科学系Ⅱ 63(2)）、pp.333-345
- 葉上太郎 (2011)「新版図の事情—“縮む社会”の現場を歩く17」『月刊ガバナンス』（No.125）
- いわき明星大学ホームページ <http://www.iwakimu.ac.jp/>
- 鎌田實監修、ふくしま子ども未来プロジェクト編 (2012)『はやく、家にかえりたい。』合同出版
- 菅野昌史・高木竜輔 (2012)「東日本大震災における檜葉町の災害対応 (1) —災害に対する行政対応」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要』（No.10）、pp.36-51
- 檜葉町史編纂委員会編 (1985)『檜葉町史』（第三巻 近代・現代資料）
- 檜葉町歴史資料館編 (1999)『写真に残されたならば』（平成10年度企画展）
- 檜葉町 (2012a)「檜葉町復興ビジョン」2012年1月30日
- (2012b)「檜葉町復興計画（第一次）」2012年4月25日
- 檜葉町ホームページ（災害版） <http://www.naraha.net/>
- 日本学校教育学会 (2012)「東日本大震災と学校教育」調査研究プロジェクト／佐々木幸寿・多田孝志・和井田清司編『東日本大震災と学校教育』かもがわ出版
- 小笠原康夫ほか (2002)『三宅島 子どもたちとの365日』ひいらぎブックス
- 大橋保明・高木竜輔 (2012)「東日本大震災における檜葉町の災害対応 (3) —教育機能の維持・再編」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要』（No.10）、pp.63-74
- 高木竜輔 (2012)「原発避難地域における高校生の震災・復興に対する意識—檜葉町を事例として」、社会学3学会合同・研究交流集会（於：いわて県民情報交流センター）発表資料、2012年3月6日
- 竹内敏英著・福島県大熊町教育委員会編 (2012)『大熊町学校再生への挑戦』かもがわ出版
- 田中淳／サーベイリサーチセンター編 (2009)『社会調査でみる災害復興』（シリーズ災害と社会8）、弘文堂
- 柳澤孝主・菊池真弓 (2012)「東日本大震災における檜葉町の災害対応 (2) —避難先における家族・福祉機能」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要』

<註>

1) 町立の小中学校三校は、一年余りの休校の後、平成24年4月からいわき市常磐西郷町の仮校舎で教育活動を再開している。

2) 福島県双葉郡は、楡葉町・浪江町・双葉町・大熊町・富岡町・広野町・葛尾村・川内村の8町村からなる。

3) サテライト校とは、他の高校や公共施設を間借りするなどして、所在地とは別の場所で教育活動を行う学校を指す。一例を示せば、平成23年度、双葉高校は福島南高校・あさか開成高校・葵高校・磐城高校の四カ所、富岡高校（コミュニケーション学科、福祉・健康学科）は光南高校・磐城桜が丘高校の二カ所、双葉翔陽高校は安達東高校・小野高校・坂下高校・平商業高校の四カ所にそれぞれサテライト校を開設し、教育活動を継続した。

4) 年代別の帰町意志については、「すぐにでも戻りたい」34歳以下1.4%、35-49歳1.6%、50-64歳4.2%、65-79歳6.3%、80歳以上10.1%、「戻る気はない」34歳以下46.0%、35-49歳31.9%、50-64歳23.9%、65-79歳16.1%、80歳以上12.2%となっている。この福島大学による調査では世帯票とは別に若者票5,000を回収し復興に向けた重要課題について尋ねているが、13-39歳を若者票として一括で扱っており、高校生世代の意識に焦点化されていない。

<巻末資料>

震災後における楡葉町高校生世代の 現在の生活と将来に関する意識調査

2012年1月

楡葉町役場

(いわき明星大学人文学部現代社会学科)

《ご記入にあたってのお願い》

- 1) この調査は、**宛名の方ご本人様にご記入をお願いいたします。**
- 2) ご回答は、あてはまる番号を○印で囲んでください。また、内には具体的な数値や地名をご記入ください。
- 3) 「その他」をお答えになった場合は、()内に具体的な内容をご記入ください。
- 4) ご回答いただく○の数は質問文の終わりに(○は1つ)とか(○はいくつでも)などと示していますので、それに従ってご回答ください。
- 5) 一部の方だけにお答えいただく質問もあります。その場合は、矢印(→)に従ってお答えください。指示のない質問については全員がお答えください。
- 6) ご回答に迷う場合は、できるだけ近いものを選ぶようにしてください。

《ご記入が終わりましたら…》

- ◎ ご記入が終わりましたら、もう一度、回答漏れがないか確かめください。
- ◎ ご記入いただきました調査票は、**2月3日(金)までに、同封の封筒に入れてご返送くださる**ようお願いいたします。切手を貼らずに投函してください。

《この調査に関するお問い合わせは…》

〒970-8044 福島県いわき市中央台飯野3丁目3-1 (いわき明星大学 大学会館内)

◎ 楡葉町いわき出張所(楡葉町災害対策本部 いわき出張所) TEL 0246-46-2551 / 2552

【あなたご自身のことについてうかがいます】

問1. あなたの性別を教えてください。

- | | |
|------|------|
| 1 男性 | 2 女性 |
|------|------|

問2. あなたの**現在**のお住まいは次のうちどれですか(○は1つ)。

- | |
|------------------------------|
| 1 仮設住宅 |
| 2 借上げ住宅(特例含む)・雇用促進住宅 |
| 3 親戚・知人宅(具体的に:) |
| 4 借家(一戸建て・アパート等で自己負担をしているもの) |
| 5 その他(具体的に:) |

問3. あなたは現在、どちらにお住まいですか。具体的に記入ください。

都道府県名	()
市町村名	()

問7. あなたの**主たる保護者(家計生計者)**は震災前にどのような形で働いていましたか(○は1つ)。

- | | |
|---------------|------------------|
| 1 正規職員・従業員 | 5 自営業主 |
| 2 パート・アルバイト | 6 家族従業(家業などの手伝い) |
| 3 嘱託・契約社員 | 7 内職 |
| 4 人材派遣企業の派遣社員 | 8 震災前は仕事をしていない |

問8. あなたの**主たる保護者(家計生計者)**のご職業は次のどれにあたりますか(○は1つ)。

- | |
|--|
| 1 農林漁業従事者(農業、養畜、林業、造園師、植木職、漁業など) |
| 2 事務職(一般事務、経理事務、ワープロ・オペレータなど) |
| 3 販売・営業職(小売店主、販売店員、外交員など) |
| 4 サービス職(ウェイター、理容師、調理人、ヘルパー、アパート管理人、タクシー運転手など) |
| 5 技能・生産工程・労務・保安職(工場作業員、建築作業員、電気作業員、大工、職人、清掃員、トラック運転手、警官、自衛官、警備員など) |
| 6 専門・技術職(研究者、教員、医師、看護師、薬剤師、弁護士、税理士、情報処理技術者など) |
| 7 管理職(課長以上の管理職、会社役員、議員、学校長、駅長、局長など) |
| 8 その他(具体的に: _____) |

実際に行っている具体的な仕事の内容をお書きください。

_____ の(を) _____ (している)

*「会社員」「自営業」ではなく、「小学校の先生」「事務機器の外回り営業」「金属製品の製造作業」「スーパーのレジ」「バスの運転」「自動車の修理」のように具体的に教えてください。

【あなたの高校生活についてお尋ねします】

問9. あなたは震災前、どの地域の高校に通っていましたか。また、震災時に中学生だった方は、どの地域の高校に通う予定でしたか(○は1つ)。

- | |
|--------------------------|
| 1 双葉郡(富岡町・大熊町・双葉町・浪江町など) |
| 2 いわき市 |
| 3 浜通り北部(南相馬市・相馬市・新地町) |
| 4 その他(具体的に: _____) |

問10. 震災後、あなたは同じ学校に(予定通りの学校に)通っていますか。(○は1つ)。

- | |
|------------------------------------|
| 1 同じ学校に通学している |
| 2 サテライトで同じ高校に通学している(入学予定の学校に通っている) |
| 3 他の高校に転校した |
| 4 その他(具体的に: _____) |

問11. あなたは震災後、どの地域の高校に通っていますか(○は1つ)。

- | |
|------------------------|
| 1 いわき市 |
| 2 浜通り北部(南相馬市・相馬市・新地町) |
| 3 中通り地域(福島市・郡山市・白河市など) |
| 4 会津地域(会津若松市・喜多方市など) |
| 5 福島県以外(県名: _____) |

【あなたの避難生活についておたずねします】

問 12. あなたの檜葉町の自宅は地震・津波によって被害をうけましたか（○は1つ）。

- | |
|--------------------|
| 1 全壊被害 |
| 2 半壊被害 |
| 3 被害はない |
| 4 その他（具体的に： _____） |

問 13. 避難生活のなかで困っていることはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください（○はいくつでも）。

- | |
|-------------------------------|
| 1 周囲に友人・知人がおらず、話し相手がいない |
| 2 新しい学校になじめない |
| 3 避難生活でストレスを感じている |
| 4 今の学校のカリキュラムや授業内容の違いにとまどっている |
| 5 学習環境が不十分 |
| 6 家族との関係がうまくいっていない |
| 7 夜、なかなか眠れない |
| 8 いままで取り組んでいた部活動が避難先の学校にない |
| 9 現在暮らしている地域の生活環境が不便 |
| 10 その他（具体的に： _____） |

問 14. 将来、あなたは檜葉町に戻りたいと思いますか（○は1つ）。

- | | |
|------------|----------|
| 1 戻りたい | (⇒問 15へ) |
| 2 戻るつもりはない | (⇒問 16へ) |
| 3 わからない | (⇒問 17へ) |

問 15. 問 14 で「1. 戻りたい」と答えた人は、どのような状態になれば、あなたは戻りますか（○は1つ）。

- | | |
|---------------------------------|-------------------|
| 1 警戒区域が解除されたら戻る | } 一回答したら
問 17へ |
| 2 ライフラインなどの生活基盤が復旧したら戻る | |
| 3 働く場所があれば戻る | |
| 4 放射線の影響が少なくなり、安全に暮らせるようになったら戻る | |
| 5 その他（具体的に： _____） | |

問 16. 問 14 で「2. 戻るつもりはない」と答えた人は、なぜあなたは檜葉町に戻らないのですか（○は1つ）。

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1 放射能汚染の除染が困難だと思われるため | } 一回答したら
問 17へ |
| 2 現在暮らしている地域の生活に慣れたため | |
| 3 親が檜葉町への帰町に反対しているため | |
| 4 檜葉町で仕事が見つかりそうにないため | |
| 5 その他（具体的に： _____） | |

問 17. 榊葉町が災害から復旧・復興するために、町が最も重点的に取り組むべきことは何だと思えますか（〇は1つ）。

- | |
|--|
| 1 長引く避難生活への対応（地域社会の絆の維持、帰町支援、避難先での支援・情報提供） |
| 2 原子力災害への対応など（経済的・精神的被害の回復、きめ細やかな除染） |
| 3 帰町後の生活環境の整備（安定した雇用の確保、インフラ等の復旧、生活環境の整備） |
| 4 これまでとは異なる新たなまちづくり（新しい産業の誘致、再生可能エネルギーの導入） |
| 5 災害に強いまちづくり（防災体制の強化、堤防や避難道路の整備） |
| 6 その他（具体的に： _____） |

【あなたの友人関係についておたずねします】

問 18. 震災前に仲の良かった友人は何人いましたか。人数をお答えください。

(_____ 人)

問 19. 問 18 で答えた友人のうち、そのなかの最も仲の良い5人について、仲の良い順に以下の項目を教えてください（5人以下の人は人数分、いない人は次の問いに進んでください）。

	性別	震災前の会う頻度	現在の居住地	震災後の会う頻度	現在、電話・メールをする頻度
例	男・ <u>女</u>	1. ほぼ毎日 ②. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度	1. いわき市 ②. 南相馬・相馬 3. 中通り・会津 4. 福島県外 5. わからない	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 ③. 週に一回程度 4. 月に一回程度 5. ほぼ会えない	1. ほぼ毎日 ②. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度 5. 連絡できない
Aさん	男・女	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度	1. いわき市 2. 南相馬・相馬 3. 中通り・会津 4. 福島県外 5. わからない	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度 5. ほぼ会えない	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度 5. 連絡できない
Bさん	男・女	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度	1. いわき市 2. 南相馬・相馬 3. 中通り・会津 4. 福島県外 5. わからない	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度 5. ほぼ会えない	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度 5. 連絡できない
Cさん	男・女	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度	1. いわき市 2. 南相馬・相馬 3. 中通り・会津 4. 福島県外 5. わからない	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度 5. ほぼ会えない	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度 5. 連絡できない
Dさん	男・女	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度	1. いわき市 2. 南相馬・相馬 3. 中通り・会津 4. 福島県外 5. わからない	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度 5. ほぼ会えない	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度 5. 連絡できない
Eさん	男・女	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度	1. いわき市 2. 南相馬・相馬 3. 中通り・会津 4. 福島県外 5. わからない	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度 5. ほぼ会えない	1. ほぼ毎日 2. 週に二・三回 3. 週に一回程度 4. 月に一回程度 5. 連絡できない

問 20. あなたは高校何年生ですか (○は1つ)。

0 高校に通っていない	→7ページの間 28 へ
1 高校一年生	→7ページの間 28 へ
2 高校二年生	→7ページの間 28 へ
3 高校三年生	→問 21 へ

【高校三年生の方のみに、進路についてお伺いします】

問 21. あなたは高校卒業後の進路をどのように考えていますか (○は1つ)。

1 進学を希望	→問 22 へ	2 就職を希望	→問 24 へ
---------	---------	---------	---------

問 22. 問 21 で「1. 進学を希望」と答えた人のみにお尋ねします。どのような学校に進学しますか。また、進学する予定していますか (○は1つ)。

1 大学	2 短期大学	3 専門学校
4 その他 (具体的に:)		

問 23. あなたはどの地域の学校へと進学を希望していますか。または決まっていますか (○は1つ)。

1 福島県内	5 関西地方	→回答したら 問 28 へ
2 福島以外の東北地方	6 中四国・九州地方	
3 関東地方	7 その他 (具体的に:)	
4 中部・甲信越		

問 24. 問 21 で「2. 就職を希望」と答えた人のみにお尋ねします。就職先は決まっていますか。

1 決まっている	2 決まっていない
----------	-----------

問 25. あなたのご職業は次のどれになる予定ですか。就職先が決まっていない人は、どのような仕事に就職したいと思いますか (○は1つ)。

1 農林漁業従事者 (農業、養畜、林業、造園師、植木職、漁業など)
2 事務職 (一般事務、経理事務、ワープロ・オペレータなど)
3 販売・営業職 (小売店主、販売店員、外交員など)
4 サービス職 (ウェイター、理容師、調理人、ヘルパー、アパート管理人、タクシー運転手など)
5 技能・生産工程・労務・保安職 (工場作業員、建築作業員、電気作業員、大工、職人、清掃員、トラック運転手、警官、自衛官、警備員など)
6 専門・技術職 (研究者、教員、医師、看護師、薬剤師、弁護士、税理士、情報処理技術者など)
7 その他 (具体的に:)

具体的な仕事の内容をお書きください。

--

の(を)

--

(している)

* 「会社員」「自営業」ではなく、「小学校の先生」「事務機器の外回り営業」「金属製品の製造作業」「スーパーのレジ」「バスの運転」「自動車の修理」のように具体的に答えください。

問 26. あなたのお勤め先はどこになる予定ですか。就職先が決まっていない人は、どの地域に就職したいと思いますか（〇は1つ）。

1 いわき市	5 福島県以外の東北地方
2 浜通り北部（南相馬市・相馬市）	6 関東地方
3 中通り（福島市・郡山市など）	7 その他（具体的に
4 会津地方	8 まだ決まっていない（決めていない）

問 27. 震災の影響で進路を変更しましたか（〇は1つ）。

1 震災の影響はない
2 震災の影響で進学をあきらめた
3 震災の影響で就職(希望)先・地域を変更した

問 28. 避難生活や原発災害で困っていること、不満に思っていることをお書きください。

問 29. 今後、楡葉町の復興にあたり、どのようなまちにしたいですか。皆さんのアイデアをぜひ教えてください。

◎ご協力ありがとうございます。同封の封筒に入れて、切手を貼らずに投函してくださいませよう、お願い申し上げます。